

Lafcadio Hearn の病蹟補遺

(病蹟／ラフカディオ・ハーン／補遺)

遠藤 みどり*

A Supplement to the Pathography of Lafcadio Hearn

(pathography/Lafcadio Hearn/supplement)

Midori ENDO*

序に替えて

来日後の Lafcadio Hearn における被害妄想傾向の出没と、彼の性格ならびに生活環境との関連については以前に述べたが^{5), 6)}, その周辺の事情について今すこし蛇足を加えておきたい。

Basil Hall Chamberlain が来日後の Lafcadio Hearn の精神保健面に果たした役割

熊本時代の Lafcadio Hearn が精神的にかなり危機的な状態にあったことは周知であるが、この時期の Hearn を言語的コミュニケーションの面においてほとんど一人で、それも文通だけで支えていたのは Basil Hall Chamberlain である^{3), 10)-12)}。熊本時代の初期には Hearn は文字通り三日にあげず、綿々たる手紙を Chamberlain に書き送り、Chamberlain も誠実にそれに返信し続けていたらしい。Chamberlain は Hearn の物事の受け取り方や解釈の歪みの原因を根気よく指摘し、正統的な考え方を示唆しつつ、しかも Gould のように性急に Hearn を「矯正」しようとはしていなかったようである。Hearn も最初はそれに従って感謝していたが、神戸移住の直前頃から我慢できなくなって来た兆候が見える。その理由の一つには、おそらくこの頃 Hearn のまわりに前報⁵⁾で述べたような、明白な理由を提示しがたい、したがって Chamberlain に説明することが不能で、無論 Chamberlain が十分理解することも出来なかった、不愉快な雰囲気渦巻いていたためもあると思われる。

晩年の Chamberlain が「Hearn の一生は悪夢の連続であった。しかし夢から醒めるとそれに気付いた。」と書いた¹²⁾には十分な根拠がある。Hearn は

Chamberlain への書簡の中で、ひどい悪夢に襲われることがよくあると告白している³⁾。これは前報⁵⁾の如く Hearn の慢性 PTSD の一つの症状と見られ、彼は長年それから脱却できなかったが、晩年に至ってそれとの対決を試みたと思われるからである。(尚、Chamberlain が離日前に Hearn を賞賛した文章の日付が、原文では1910年となっていたのに、後年 *Things Japanese* の第6版の序文への収録にあたって1906年と直されたらしいこと¹²⁾は興味深い。1911年に離日した Chamberlain が、1906年に起こった Hearn の在米時の同棲(または結婚歴)の露見や^{15), 19), 20)}, それに続いた Gould による以前の素行の暴露⁷⁾を、欧米のニュース情報の乏しかった滞日中は知らずにいたということはある得であろう。一旦そうしたスキャンダルを知ってしまえば、欧米での日本通の第一人者である大御所教授としての Chamberlain が、それまでのように Hearn を庇い通すわけに行かなくなり、自分への私的な書簡中で洩らされていた内容を見直す気になるのも当然である。Hearn はまた Chamberlain への書簡の中で、自分には以前発表した但那のことを後悔している作品があり、その断片を同封するとも述べている³⁾。断片そのものは公にされていないが、この作品はおそらく *Karma*⁸⁾ではないかと想像がつく。)

*Karma*と Bisland

Hearn の実母はかなり衝動的な人であったようで、晩年の約10年間入院していた精神病院で59歳で死亡している。その血を享けた Hearn 自身も若年時には相当に衝動的であったが、中年期以降はそれをかなり自覚し自己統制に努めていたらしい。また Hearn は夢想的でもあったが、若年来模倣していた Baudelaire ほど現実逃避的ではない。「Hearn がユーモアを解しない」という Gould の見当外れな評言⁷⁾は、或いは笑いを憎悪した分裂気質者 Baudelaire を Hearn が当時

*心理学教室 Department of Psychology

まで振り入れていたことによるのかも知れない。) Hearn はこの他にも短編小説家として Maupassant をもいちやく振り入れており、生活態度の上でも彼らに学んでいたようである^{19), 20)}ので、どこまでが彼の本来の性向なのか、それとも表層的な模倣にすぎなかったのかが、分かりにくい点もある。しかし、生育環境の文化的多様性と不安定さや、友人たちへの極端な愛憎両面の投影的同一視および反面における人懐こさなどから見ると、彼は境界型パーソナリティー構造の持ち主であったと見るのが最も妥当と考えられる²⁾。こうした人物が、ジャーナリストから作家へ移行しようとして中年のアイデンティティーの危機に直面し、自らの影の部分を整理しかねていたというのが、Bisland に出会った時期の Hearn の精神状態ではなかったかと思われる。

一方、Bisland の自伝的著作とされる *A Candle of Understanding*⁹⁾ の内容が、どの程度彼女自身の体験に基づくものかは不明であるが、その中には、若いお転婆なヒロインが中年の文人に惹かれるかなり重要なエピソードがある。*Times-Democrat* 紙上の Hearn の文章のファンであった Bisland から見れば、知り合った頃の Hearn は、新奇な知識の豊富な教養ある中年文人と思えたであろう。しかし彼が記事の中に術学的に織り込んだフランス語やラテン語は、実は Gould が指摘した通り、正規のものではなく、背伸びして飾られたものであった。しかも1880年頃の Hearn のエッセイから推すと、生活に余裕ができ東洋的汎神論に影響されていた当時の Hearn は、ユング派で言うところの「Animaが浮遊している」状態にあったようである(参考1参照)。たまたまその時期に彼に接近し、当時の南部良家の家庭環境に不満であった活潑な美女 Bisland¹⁵⁾は、この Hearn の「Anima」を投影され、彼女の方も Hearn の実像を知らずに自らの「Animus」を Hearn の上に投影したのではないかと考えられる。その背景には、独立精神や知的好奇心を隠さない、当時の女性として新しい生き方のため、彼女自身も世間からの疎外感を味わい、「他の誰も自分の気持ちをわかってくれない」という淋しさに共鳴する部分を持っており、ニューヨークで二人が再会した1889年秋頃、それを素直に表明もしたことがあったのではないかと考えられる。とすれば、教養ある女性に対して劣等感を持っていた Hearn が有頂天になったのは無理もない。

こうした場合の常として、Hearn は Bisland に対しては、説明抜きで何でも判って貰えるかのような親密感を持った反面、自らの秘密や真の姿^{1), 6), 7), 18) - 20)}——過去の女性問題を含めて——を見抜かれる不安にも始

終怯えることになった。その親密感と不安を同時に投影された Bisland は、東洋思想に惹かれはじめていた Hearn により、過去からの輪廻転生が結果した「無数の魂を持つ女性」という(これもユング派の言葉を用いればヌミノース的な)描写をされることになったのではないか。そうした雰囲気は Bisland の方にも何となく薄気味悪く感じ取られ、彼女は仄めかされた Hearn の愛の表白を無意識に避けるためもあって、たまたま *Cosmopolitan* 誌から申し出のあった世界一周旅行の提案¹⁵⁾に唐突に応じた可能性がある。

1890年に発表された Hearn の作品 *Karma*⁹⁾ は、彼の実験の経験の描写と見なされたこともあるが、そのヒロインはおそらく主として Bisland と Gould とを合成して作り出されたのではないかと思われる。「あなたが私に知ってほしくないとお感じになることを皆、ちゃんと書いて下さい」という *Karma* のヒロインの要求は、Bisland が実際にしたものなのか、それとも実は Gould が Hearn に課したものなのかは不明であるが、いずれにしろ Hearn はその草稿を Bisland に読ませたことがあるらしい。Bisland は当然それを創作として読み流したようであるが、主人公の過去の女性と子供の存在を仄めかすその内容が、Hearn の死後1906年に遺産相続の権利要求を掲げて名乗り出た、子連れれの混血女性に関する報道^{15), 19), 20)}と状況的に一致していたため、Gould らには創作の内容が事実として受け取られ、*Karma* のヒロインは Bisland であると考えられたらしい。(*Karma* では過去の女性は死亡したことになるが、Hearn 自身もそう思っていた可能性はある。子供は Hearn の実子ではないとされているが、Hearn が勉強を教えたり養育費を送金したりしていたことはあったらしい¹⁵⁾。)

Bisland が Hearn の家族に依頼されてその伝記と書簡集を編むに当たって、Gould からも資料の提供を受け、しかも1906年の出版の際にその一部を使用しなかったのは、こうした理由があったためであろう。彼女としては、この本ですべてを伏せ、その中から当事者としての自らの姿を消してしまうのが、最も無難な收拾の方法であると考えたらしい。しかし Gould はそれに不満であり、直ちに自著⁷⁾を出して Hearn の実際の姿を暴こうとしたが、Hearn の生い立ちを十分に確かめずに感情的に一刀両断し過度に悪人視したり、独断的な「眼鏡哲学」の自説による説明に固執しすぎたため、のちの研究者からはあまり顧みられなくなった。しかし、当時のアメリカの世論はむしろ Gould らに味方し、Hearn の評価はスキャンダラスに逆転した。アメリカ東部やイギリスでは、その影響が今だに尾を

引いているらしい。

Bisland がこれらの憶測的誹謗と敢然と闘ったのは、無論自分の若い時の世間知らずな迂闊さのために、夫をはじめとする家族に迷惑がかかることへの防衛でもあったであろう。彼女は後年、夫の死まで約10年にわたってその病気を看取り、夫への尊敬と感謝を表明している¹⁵⁾。

こうした事実を踏まえて見れば、そのあたりの事情を知っていた長男の一雄が Bisland の死後、一時神経症的になった^{9), 13), 14)}のも無理からぬことと考えられる。

夏目漱石・芥川龍之介とHearn

芥川龍之介は19世紀のヨーロッパの耽美主義から影響を受けたことを自ら告白しており、GautierなどをHearnの英訳で読んだらしいことが研究者によって指摘されている²¹⁾。怪奇な要素の多い再話文学の短編作家として両者は共通しており、芥川の一高での親友井川恭は旧制松江中学の出身で、初恋に破れた芥川が吉原通いのあとの病後の幾日かを松江で過ごしたことも知られている。また、芥川の「藪の中」がHearnのスカンダルに関する諸証言の喰い違いを思わせると指摘する人¹⁵⁾もあり、Lotiの死の報に接した芥川の「ロティの描いた日本はヘルンの描いた日本よりも真を伝へない画図かも知れない。」という感想や、1926年刊行の「小泉八雲全集」(第一書房)の出版案内に芥川が寄せた、「小泉先生の仕事は…我々日本人にも日本を教へられたことにあると思ひます。少なくとも小生などは大分そのおかげに預りました。」という文章も残されている。東大赴任時、前任者Hearnの人気のために小山内薫など学生からのボイコットに遭った、芥川の師夏目漱石の作品「三四郎」⁹⁾には、講義が済むと教員控室へ入らず不忍池の周囲を廻ってあるくHearnに関する(与次郎による)伝聞描写があり、また「夢十夜」¹⁷⁾には、Hearnの*Fantastics*や*Kwaidan*などと共通する要素があるという指摘⁹⁾もある。芥川には、書き損じの原稿まで克明に保存していた母代わりの伯母という、Hearnのセツ夫人に匹敵する存在があり、Hearnの直接的影響の実証が皆無ということは、却って作作的な感じがしないでもない。このことと、日本では最近まで伏せられていたHearnのスカンダル^{6), 15), 18), 20)}との関係の有無は不明である。漱石も芥川も生育環境はHearnよりは良好であった。しかし漱石は幼時に実母を失い実家と養家を転々とし、芥川は実母の精神疾患のため、やはり幼時に実母と離れて育った。生育歴の面でも、またパーソナリティーの面においてもHearnと通い合う点があるだけに、明治

日本において欧米の文人の典型のごとく扱われたHearnと、ほとんど踵を接する時期に東大英文科に在籍した彼らの作品へのHearnの影響は、更に考察に値するのではあるまいか。

参考1

幽霊 (抜粋訳)

A Ghost
by Lafcadio Hearn
(Dec. 1889)

Harper's Magazine, New York

生まれた土地から離れてさまよったことのない人は、たぶん幽霊を知らずに一生を過ごすだろう。しかし放浪者は、幽霊と近づきになる可能性がかなり多い。私というのは、希望や利得に唆されたり楽しみからそう決めたりするのでなく、単に自分の本性の或る必要性に促されてさまよう、文明化された放浪者、___その内部の秘密の性質が、彼がただ偶然所属している社会の安定した条件と全く異なっている人間のことである。どんなに知的訓練を受けていても、彼は常に、合理的な源のない単一の衝動の奴隷であり続けざるを得ず、その衝動はしばしば、彼のあらゆる物質的利害に絶えず野蛮に抗するだけでなく、その支配力によって彼を驚かすのである。…… (中略)

II

(中略) 他方、多かれ少かれあてのない漂泊の途中で、あなたの中には、何者かにとり憑かれているのではないかという疑いが、ゆっくりと育てて来ている。……視覚的な記憶に或る霧のかかったような存在がしばしば侵入する。しかしこれは、明確さを失うよりはむしろ獲得するように見える。反復するごとにそれは見えやすくなるように思える。……そして、あなたが憑きまともわれているのではないかという疑いは、次第に確信にまで発展する。

III

あなたは憑かれている、___ロンドンの冬の褐色の暗がり歩いていようと、赤道直下の紺碧の輝きの中を歩いていようと、___足跡を刻むのが雪の中であろうと、熱帯の浜の灼けつくような黒い砂であろうと、___北国の松の木の暗い蔭に憩おうと、椰子の蜘蛛手に伸びた葉むらの下で休んでいようと、___あなたはどこでも絶えず、或るひそやかな存在に取り憑かれている。この憑きもの……ごく優しい顔……親しみのある——蜂

の羽音のように弱くはあるが、奇妙に馴染み深くはつきりした声……には、恐ろしさは全くない。

しかしこの憑依は、___まるで、夢を見た幾人かの人、先祖から受け継いだ思い出、前世の記憶と解釈しようとした、一見我々に所属していないような内部の突然の驚くべき感覚のように、___もどかしくいららした感じを起こさせる。……あなたは空しく自問する。___「誰の声？ ___誰の顔？」 その顔は若くもなければ老いてもいない。それは蒸気のように定義しがたく、謎を残す。___それは透き通って、特にどんな色調も呈していない。___多分、髯があるかどうかも定かでないだろう。しかしその表情は常に優美で、激しさがなく、微笑している。___あらゆる愚かな行為に、夢の愚行にさえ、限りなく耽っている夢の中の未知の友の微笑のように。……あなたがそれを永久的に消してしまえないこと以外に、その存在はあなたの意志に何ら確かな抵抗を与えない。それはあらゆる気まぐれを従順に受け入れる。それは天使のような忍耐をもって、あなたのあらゆるむら気を迎え入れる。それは決して批判しない。___決してちらとも嘆いたりせず、___厄介なものになることなど決してない。しかもそれが持つ或る奇妙な力___、昔のぼんやりした甘い悔恨、___埋もれたままで死に絶えることのない何ものかのよう、あなたの心の中の何かを掻き立て震わせる力のために、あなたはそれを無視することができない。……そして、そういうことがあまりたびたび起こるので、その謎を解きたいという望みは苦痛と化し、___とうとうあなたは自分が、その存在に哀願している、___それに問うているのを発見するのだが、それは決して直截に答えず、微笑するかそれとも、問いに無関係な言葉、___謎めいた言葉を発するだけであり、記憶の古い見捨てられた領域の中に、広い荒れた沼地の上の風のように早く、あらゆる草に何もささやかめように命じさえて… 神秘的な苛立たしさを醸し出すのである。しかしあなたは、倦むことなく、幾日も幾夜も問い続けるだろう。___

___「お前は誰？ ___お前は何？ ___お前が私に対して持っているこの奇妙な関わりは何？ お前が私に言うことはみんな、以前に聴いたことがあるような気がする___でも、どこで？ ___でも、いつ？ 私はお前をどんな名で呼べばよいのか、___私が思い出すことにお前はどの答えもしてくれないのだから？ きっとお前は生きものではないのだ。でも私は死んだ人が眠っている場所を全部知っているけれど、___お前の眠る場所を私は知らない！ それにお前は夢でもない。___夢は歪んだり変わったりするけれど、お前は、お前は

いつも同じだ。それにお前は幻でもない。だって私の感覚はすべて鮮明で強いからだ。……このことだけは疑いなくわかっている。___お前が過去に所属するというは。お前は記憶に所属している___しかしどんな死せる太陽の記憶に属しているのか？……」

そして、ある日またはある晩、思いがけず、とうとうあなたには、___見えない指のようにやわらかい速やかなショックと共に、___その顔は一つの顔の記憶ではなく、似ている点が重ね写しになり、愛着によって混ぜ合わされて、一つの霊のようなものになった、___多数の親しい顔の特徴から作り上げられ、限りなく共感と呼び、幻影のように美しい、複合的なイメージ、思い出の合成物であることがわかる！ そしてその声は、誰か一人の声のこだまでなく、一つに溶け合った多数の声の残響、___あり得べからざる一つの声、___時の悠遠さで薄れてはいるが、言うべくもなく愛しい反響なのである。

IV

優しさの極みの合成物よ！ ___失われたあらゆる共感から、震えるような感動を伴って、この世の姿として送り込まれた、無名の絶妙な非現実___消え失せたあらゆる愛しきものの霊よ！ ……(中略) 汝は私の消失と共に永久に、___たとえば私の投げかける影のように、消え去らねばならないのか、おお、魂の影よ？…… (後略)

参考 2

業 (カルマ)⁹⁾ (抜粋訳)

Karma
by Lafcadio Hearn
(1890)

あらゆる並外れた頭脳の訓練を受けていながら、彼女には言葉や行為すべてに、ほとんど子供っぽいと言ってよい純真さ、—ものごしの簡素で直截なところが、それがあらゆる立派な人の信頼を魅き寄せた。それでも彼は彼女を決して賞賛する気にはならなかった。彼女の生活にとって空の青さと同じくらい自然なその輝かしい少女っぽさの背後に、ある確乎たる力、—贅辞など非礼に思えるであろう或る種の強力な知性があるのを彼は知っていた。そして、彼女のパーソナリティーから受けるまさにその感じのために最大の率直さを強いられて、彼は愛の告白をするのには少なからぬ勇気を要することを見出した。(中略)
…汝が口にした考えは、彼女の繊細な脳の中に築かれ

たあの秘密のすばらしい信念の建造物の中で用いられたのだ。それはそんな聖なる用途に役立つに十分なほどに、事実で、強靱で、欠点のないものだったであろうか？——そうではなくてそれは、安っぽい偽物で、——うっかり圧さえるとひとたまりもなくへこんでしまい、こわれるのと一緒に、それに無邪気に縫った魅惑的で優美な織物を全部、だめにしてしまうのではなかったろうか？（中略）

しかも、霊的な怖れなしに彼女を愛することが出来るようか？——彼女を創り出したあらゆる希望や努力や犠牲や苦難をいささかも考えることなしに？——過去とその不毛の苦に対する、——彼女が光を見るかも知れないことを苦心して作り上げた、消え去ったすべてに対する、汝の怪しい責めを恐れることなしに？それらは無数かも知れない。しかも、彼女という単一の華奢な存在に内包された可能性の夥しさは、言い表せぬほどいかに更に広大なことか！汝が責めを負うのは、犠牲となった過去に対してのみではなく、来るべき神秘なる未来に対しても、また更に多くのもの、——そして、常に内的なまた遥かな作用を及ぼしている、かの未知なるもの、——善なる意志に対してもなのである。……彼女の若い心を通じて、神なる未来全体が薔薇色に脈打っているのである。その愛、その信、その希望が、——すべて花のように、彼女の精妙なる生という蕾の中に畳まれて、そこで息づこうとしているのである。（中略）

しかしこの次第に強くなる恐れ、——非常な苦痛の前兆のような——は、何故だろう？……彼はどのようにあのほっそりした乙女を、彼女を愛しながらでさえ、いつも怖れていたのか？——わけもなく、まるで超自然の存在のように、——彼のあらゆる考えを彼女の存在という不思議な制約の中で測りながら？……もしも完全な愛が怖れを追い払うものなら、彼の愛は何と不完全であることか！彼自身の本性が不完全であるのと同じほどに不完全だったのだ。しかし彼は、もっと不完全に愛していたので、怖れを考えてもみななかったのだ。……彼女はどんな不可思議な力で彼をこんなに怖がらせるのか？彼女を他のすべての女性たちと違ったものにしてるのは、彼女の簡素な美しさ、全くわざとらしさのない優美さよりもおそらく、この秘密の力を穏やかにしっかりと意識していることの方が、与るところが大きいのであろう。あの美しい灰色の眼は、保証してもいいが、生あるものの凝視の前には決して伏せられたことがないのである。彼女は、神の顔すら覗き込み得る人のように見える。……彼女の持っているような力の感覚を、男たちは「性格の強さ」と

して分類しようとするだろう。——しかしその漠然とした用語は、その力を事実として認めること以上の意味を持たないであろう。その事実自体は解釈不能なのであろうか？——生の神秘のような神秘的なのであろうか？（中略）

……ひょっとすると彼女は赦してくれるだろうか？

彼女は慈悲深くはないだろうか？彼女は、彼がそんなに熱烈に表明した悔恨を見て、彼を許すことができると思うように彼女を促す、人間性の弱点についての直観を持ってはいないだろうか？そして、彼女の独自の判断の不思議な能力、——普通の人たちの意見とは全く異なった規準で性格や行動を測る不思議な能力に、いくらかの希望を置いてはいけないだろうか？

多分。……しかし因習的な物の考え方に対する彼女の気高い無関心の中には常に、外科医の鋼鉄のメスのように確乎とした道徳的信念が顕われていた。……そして彼にははじめてぼんやりと、何故彼が彼女を怖れたか、——彼女の中の何を彼は怖れたのかを感じられた。それは、彼が理解することなしに感じた、透徹する力動的な、道徳的力であった。……彼の告白の分析にその力が適用されるという考えが、また彼の心を沈ませた。（後略）

文 献

- 1) Bisland E (1903) : A Candle of Understanding. Harper & Brothers, New York
- 2) Bisland E (1906) : The Life and Letters of Lafcadio Hearn. Houghton Mifflin, Boston
- 3) Bisland E (1910) : The Japanese Letters of Lafcadio Hearn. Houghton Mifflin, Boston
- 4) Bronner M (1908) : Letters from the Raven: Being the Correspondences of Lafcadio Hearn with Henry Watkin. Archibold Constable, London
- 5) 遠藤みどり(1997) : Lafcadio Hearn の病蹟. 島根医科大学紀要20: 17-21
- 6) 遠藤みどり(1998) : アメリカ時代のLafcadio Hearnにおけるメンタルヘルス上の援助的枠組——彼のパーソナリティーとの関連において——. 島根医科大学紀要21: 1-6
- 7) Gould GM (1908) : *Concerning Lafcadio Hearn*. T.Fisher Unwin, London
- 8) Hearn L(1890) : *Karma*. Lippincott's Magazine, New York
- 9) 平川祐弘(1981) : 小泉八雲 : 西洋脱出の夢. 新潮社
- 10) 平川祐弘(1987) : 破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解. 新潮社

- 11) 平川祐弘編(1993)：小泉八雲 回想と研究. 講談社
 12) 平川祐弘編(1994)：世界の中のラフカディオ・ハーン. 河出書房新社
 13) 小泉一雄(1931)：父「八雲」を憶ふ. 警醒社
 14) 小泉 時(1992)：ヘルンと私. 恒文社
 15) 工藤美代子(1997)：夢の途上：ラフカディオ・ハーンの生涯(アメリカ編). 集英社
 16) 夏目漱石(1908)：三四郎. 朝日新聞
 17) 夏目漱石(1908)：夢十夜. 朝日新聞
 18) 関田かおる編著(1991)：桑原春三所蔵 知られざるハーン絵入書簡. 雄松堂出版
 19) Tinker, EL (1925): *Lafcadio Hearn's American Days*. John Lane The Bodley Head, London
 20) 遠田勝訳(1984)：E.スティーヴンソン著, 評伝ラフカディオ・ハーン. 恒文社
 21) 倉智恒夫(1978)：芥川龍之介とテオフィル・ゴージェ. 吉田精一・福田陸太郎監修：比較文学研究 芥川龍之介. 朝日出版社

(受付 1998年10月2日)

島根医科大学紀要 第20巻(1997)

Lafcadio Hearn の病蹟 (遠藤みどり)

正誤表

頁	段	行	誤	正
17	右	1	男	の息子
17	右	3, 12	伯母	叔母
18	左	9		
18	左	1	教授	講師
20	右	最終	7)	8)